



# 「これくらい大丈夫」という気の緩み

保健管理・総合相談センター総合相談部門 講師  
井ノ崎 敦子 (いのさきあつこ)



年明け早々にスキューバ事故が起こり、13人の若者の命が奪われました。現在も専門家による原因解明が続けられていますが、バス会社が運転手の運転技術不足を認識していたにも関わらず人員不足を理由に「これくらい大丈夫」という気の緩みから運転させていたことがわかっていきます。

「これくらい大丈夫」というバスの会社の気の緩みが、多くの人間の命を奪うことになったことは大変許しがたいことです。しかし、振り返って考えてみれば、「これくらい大丈夫」という気の緩みによって生じる問題は日常的に存在するのではないのでしょうか。

例えば、ハラスメント行為は、教職員や学生が、立場を悪用して「これくらい言っても(行っても)大丈夫」という心の緩みから起こす人権上の問題行為と言えます。また、最近話題の薬物乱用も、「こ

れくらい大丈夫」という気の緩みから薬物に手を出し、続けることによる健康上の問題行為と言えます。さらには定期試験等におけるカンニング行為や研究における不正行為も「これくらい大丈夫」という心の緩みから起こる学問上の問題行為です。

私が拠って立つ精神分析理論(自我心理学)では、「これくらい大丈夫」という心の緩みを心の不健康さの指標の1つととらえています。規律を守るなど自己を律する力が十分機能せず、正しい判断と行為ができない心理状態のあらわれと考えられています。「これくらい大丈夫」という気の緩みは、その深刻さに応じて自己や他者の安全や幸福を奪うことにつながります。ハラスメントは加害者と被害者の人生設計や安全を壊します。薬物乱用は行為者の心身の健康を奪います。カンニング行為や不正行為は、行為者の学問的成長を奪います。

「これくらい大丈夫」という気の緩みは、繰り返すことで習慣化し、次第に問題性を軽視することで問題行動を止めることができなくなり、これを精神分析では自我親和的になると言います。自我親和的になると、問題を問題として認識できなくなるので、その

問題を自主的に解決できなくなり、問題がよぎったときに少し立ち止まり「本当に大丈夫なのか」と確認することが大切です。いつからでも気の緩みを正して心の健康を取り戻すことは可能です。自

分の判断や行為に「これはまずいのでは」と違和感をもたれたら、どんなことでも結構ですので、気軽に保健管理・総合相談センターにご相談ください。心の健康を取り戻すお手伝いをさせていただきます。



面談室

## 地域貢献

### 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COCプラス)「とくしま元気印イノベーション」人材育成プログラム

### 実践力養成型インターンシップの試行

県内の産業界、自治体、高等教育機関が連携し、インターンシップ等の教育カリキュラムの見直しや雇用創出等の各種事業を行って県内就職率の増加を目指す、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)「とくしま元気印イノベーション」人材育成プログラム(H27~31年度事業)がスタートしました。

今年4月の入学学生から、教養教育科目に14科目設定されている「地域科学教育科目群」の中から2単位以上の選択履修を義務づける『地域理解のための教育(2単位)』が開始されるとともに、来年度から希望者を対象に実施する「専門教育プログラム(16単位)」の検討や、教員が少人数の学生を担当し、受入先企業のメンター(指導者・助言者)と連携して事前学習からインターンシップ、事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式インターンシップ(2単位)」の導入に向け

た「実践力養成型インターンシップ」の試行が開始されています。今回は、「寺子屋式インターンシップ」の導入に向けて、その課題や問題点、ノウハウを得る目的で試行を開始している「実践力養成型インターンシップ」について説明したいと思います。

「実践力養成型インターンシップ」の終了後には、協力企業や参加学生、教員、COCプラス推進コーディネーター等が集まって報告会を開催し、情報共有を図ります。COCプラス事業では、地域で活躍する人材育成に向けて県内の産官学が連携し、教育カリキュラムの改善や、県内高等教育機関との連携事業、雇用創出等の諸事業を行っています。皆様方のご理解とご協力をお願いします。

「実践力養成型インターンシップ」の概要  
「実践力養成型インターンシップ」は、現在、正規科目として総合科学部と工学部の3年生を対象に実施している「短期インターンシップ(2単位)」の枠組みを活用して実施します。(他の学年や学部の学生も自由に参加できますが、単位の付与はできません。)

県内約10社の協力企業とCOCプラス推進コーディネーターは、連携して実践力養成型インターンシップの課題(ミッション)を策定します。参加学生は、夏休みや休日等の期間を活用しながら、関心のある「ミッション」

に挑戦する1か月程度のインターンシップを行い、その「ミッション」を完遂することにより、自分の成長に繋げることができます。

「期待できる効果」  
① 組織や仕事のやり方を学び、自己の適性や職業選択について考える契機が生まれる。  
② 職場や社会のルールを知ることによって、就職後の適応能力を高めることができる。  
③ 実際の現場に触れることで自分の欠点を自覚し、学習へのモチベーションが高まる。  
④ 年齢の異なる人々との交流によって、世代間コミュニケーションが学べる。



徳島大学理事・地域・産官学連携担当 副学長  
徳島大学地域連携戦略室長  
吉田 和文 (よしだかずふみ)

